

3) 正骨範 (1807; 二宮彦可) は解体新書発刊から 30 余年後の書であるが、他の資料とは全く異なり、中国の古い時代の用語の直接使用で、現代用語に連なるものは全くない。

4) 整骨新書 (1810; 各務文献) の用語は頬骨、口蓋骨、鋤骨相当に独自の用語 (髑骨、後齶骨、隔骨) を用いている外は重訂解体新書のものとあまり変わらない。

5) 解剖攬要 (1881) は東大の初代解剖学教授 (1877~) 田口和美編著で、日本人による最初の系統解剖学教科書とされる。特異的な点は顔面骨に涙骨、鼻骨、上甲介骨 (下鼻甲介) 及び「鋤骨」が含まれ、舌骨が除外されていることである。この中の鋤骨という用語は初めての登場で、やがて制定されるようになる日本語学名に入れられている。また、「齶」がもとの顎に戻されている。

6) 公式な日本語学名の制定は、1895 の BNA (Basel Nomina Anatomica) による国際的制定から 10 年遅れで公表 (解剖學名彙: 鈴木文太郎, 1905) されたが、頭蓋・顔面骨用語の 6 割は両解体新書から採られ、新たに上甲介骨が「下鼻甲介」として新用語に入れられた。

7) 改訂解剖學名彙 (1932) では、顱頂骨が「頭頂骨」に、顱顳骨がカッコ付きで「側頭骨」に併置され、「あご」が齶から再度、顎に戻された。

8) 終戦近くなつての再度の改正 (1944) では、顱顳という「医心方」以来の複雑な用語は消えて「側頭骨」へ、楔状骨 (蝴蝶骨) は「蝶形骨」へ、髑骨が「頬骨」へと変化して現在に続いている。

9) PNA (1955) の改訂で下顎骨の関節突起と筋突起のラテン語名は BNA 制定時のものにほぼ逆戻りして、日本語名だけがそのままである。1944 年の用語改訂で「髑」、「喙」などの漢字が削除されたこともあって字義どおりには戻りがたいのであろうか。

26) 北部九州と近隣における解剖の歴史あれこれ (その 1)

Secret Histories of Anatomy in Nishi-Nippon (1)

北九州市 ○上瀉口 武

九州歯科大学 小林 繁
嶋村 昭辰

Takeshi Kamigatakuchi, Kitakyushu-City
Sigeru Kobayashi and Akitatsu Shimamura,
Kyushu Dental College

演者らは、いま迄北部九州を中心にして、近辺各地の医学史跡を訪ねてきたが、解剖事績については、すでに先賢により報告がなされ完結されたものであったり、解剖が行なわれたと分かっているものの解剖図もなく、それ以上手掛りがなく放置されていたものもあった。今回これらを検討して幾らかの知見を得たので報告する。

近代の解剖学は京都の山脇東洋の「蔵志」(1759 年) に始まり、杉田玄白の「解体新書」(安永 3 (1774) 年) により確立されたとみることができる。事実これ以後の解剖図には「所謂解体新書大幾里爾図」(長州、栗山幸庵ら) の解体新書の影響を受けた解剖用語がみられる。

ところが北部九州においては「解体新書」以前の記録をみることが出来る。

解体新書以前

本木良意 (庄太夫, 1628~98 年) オランダ通詞はドイツ人、ヨハネス・レムメリンの 17 世紀後半のオランダ語解剖書の翻訳「和蘭全軀内外分合図」を著わしている。良意は元禄 10 年に死亡したので、その訳はそれ以前とみられ、死後 75 年経った明和 9 年、鈴木宗伝により出版された。表面を開き内部をみる形式になっている。同時代、黒田藩医六代原 三信 (~1711 年没) は長崎に留学、蘭医アルプト・ゴロウヌより蘭方外科医の免状 (1685 年) を授与された。同じ頃、ヨハネス・レムメリンの解剖書を写した「人体解剖図譜」を著わしている。これは上記と同じ書物とみられ、人体各部をイロハ別にわけて符号を付したもので、家伝書として長らく公開されなかったため、広く知られなかった。これらの訳語は顱: あぎ、あぎと、

項：うなじ，喉：のんど，など日葡辞書，和名類聚抄に見られる中世以前の日本語を用いている。

三浦梅園 (1723～1789 年)

大分県国東半島に，江戸期の碩儒三浦梅園は，安永 2 年夏，当時の医学資料を収録した「造物余譚」に麻田剛立の狐の解剖記に“ゲールクワの如きものあり”と書いている。この語は杉田玄白の「解体新書」刊行以前の「解体約図」安永 2 年正月刊行に記載のものが，その年の三月，大阪の中井履軒の書「越俎弄筆」に剛立の剥獣のことが収録されており，前年出奔して大阪に出た剛立と親友梅園の情報伝達の速さに驚くものがある。

鎌田玄台 (1793～1854 年)

大洲藩（愛媛県）の外科医鎌田玄台正澄は華岡青洲の高弟として知られているが，弘化 3 (1846) 年初夏，門弟教育のため解剖を行なっている。養子新澄が執刀して門下の樋口景春，松岡公正，松沢截澄，糸川維寧新，岩井重長らが参会し，解剖図を記録している。序文によると，浪速の各務文献の「整骨新書」文化 7 (1810) 年刊を参考にしていて，解剖図を仔細に見ると図中に動脈，血脈と「解体新書」の用語の記載がある。

各務文献には寛政 12 年 4 月の解剖の「婦人内景図」があり，図中に大機里爾（膀胱）の図示がある，宇田川玄真の「医範提綱」（文化 5 年刊）より前なので，この用語は「解体新書」に由来するものであり，従って鎌田玄台一門の解剖図は「解体新書」の流れにあることが判る。

津和野藩の医学教育

津和野藩（島根県）の吉木蘭斎（文化 14～安政 6，1859 年没）は若年より江戸で坪井信道 (1795～1848 年) に学び，嘉永 2 年藩校養老館に医科が新設されると，その教師となる。解剖教育に「重訂解体新書」（大槻玄澤著文政 9 (1826) 年刊行）を使用した。

養老館蔵書のなかに「和蘭字彙」（桂川甫周蔵梓，安政 2 (1855) 年刊）があり，文中の解剖訳語にキリールが見られ，刊行は既に幕末であるが，原本のゾーフ・ハルマ (1811 年～) あるいは江戸ハルマ (1796 年～) の刊行年を考えると，「解体新書」の由来であることが推定出来る。

津和野藩では蘭斎が早世のためか，解剖の事績はないが，医学教育は門人の室良悦らに引き継がれ，後年の森鷗外の幼少教育となったといわれる。

27) 北部九州と近隣における解剖の歴史 あれこれ（その 2）

Secret Histories of Anatomy in Nishi-Nippon (2)

北九州市 ○上瀉口 武

九州歯科大学 小林 繁
嶋村 昭辰

Takeshi Kamigatakuti, Kitakyushu-City
Sigeru Kobayashi and Akitatsu Shimamura,
Kyushu Dental College

北部九州における解剖事績については，長崎においてシーボルト，ポンペのオランダ医学教育の一貫性の中で扱われ，シーボルトの時代は，宗教的，地域的，人種的問題があつて解剖は行なわれず，幕末ポンペの時代になって実施された。ポンペの解剖は安政 6 (1859) 年，長崎西坂刑場で行なわれている。

村上玄水 (1781～1841 年)

中津奥平藩医，村上玄水は文政 2 (1819) 年 3 月，長浜刑場で解剖を行なっている。執刀したのは玄水で，当日の参会者は中津，近隣を含め 50 余名であった。現在，肝心の解剖図は見つかっていない。

後日，玄水の「解剖図説」が見つかり，その中の「解臓記」の解剖用語について見ると，動脈，静脈，腸間膜，乳糜管（ゲールクワ），膀胱（大機里爾）など宇田川玄真（榛斎）の「和蘭内景医範提綱」（文化 2 (1805) 年刊行）の解剖用語が用いられていた。

中津藩は「解体新書」翻訳の中心人物であった前野良沢がおり，藩主奥平昌高の中津辞書などから「解体新書」との係わりが自然と考えられるが，藤野恒三郎らによると，当地で苦学中の坪井信道が文化 12 (1815) 年，日田の広瀬淡窓から紹介された中津の辛島成庵宅で「医範提綱」を見て発奮し，文政 3 年江戸で宇田川玄真に入門している。この文化・文政時代，中津藩に解剖書として「医範提綱」が流布されていたことが判る。

黒田藩解体事績 (1841 年)

黒田藩では天保 12 (1841) 年，博多大浜で人体解剖が行なわれた。百武万里を盟主として谷仲栄，武谷元立などを主にして，解剖従事者の分担表が